

<研究ノート>

## 神聖ローマ皇帝カール4世の自叙伝

－ 翻訳と註解 (1) －

小松 進\*

### The Autobiography Written by Holy Roman Emperor Charles IV: Translation into Japanese and Commentaries (1)

Susumu KOMATSU \*

#### 1. はじめに

カール4世(1316～78年)は中世後期の中央ヨーロッパに君臨し、わけても立法者(Gesetzgeber)として歴史にその名をとどめている。ルクセンブルク家出身の神聖ローマ皇帝(在位1346～78年)としてカールは1356年に金印勅書を発布し、大空位時代(1256～73)以来1世紀あまり続いた王位継承をめぐる抗争に終止符を打ち、帝国にある程度、秩序と安定を回復した。カールの制定したこの金印勅書は、周知のように、帝国が消滅する1806年まで450年間、帝国の国制を規定する基本法として機能する。また、チェコ王国の国王(在位1346～1378年)としてカール(チェコ王としてはカレル1世)は、パリと並ぶヨーロッパ文化の中心地として<黄金のプラハ>(Zlatá Praha)を築き上げる一方、王国基本法としてマーイェスタース・カロリーナ(Maiestas Carolina)を起草し、神聖ローマ帝国の中核としてチェコ王国の強化と繁栄を図った。しかし、こうした事績によっ

てばかりではなく、カールは当代きっての文人皇帝として名を馳せ、神聖ローマ皇帝としては史上初めて中世ラテン語による自叙伝を著わし、その類稀な個性を歴史に鮮明に刻みつけている。

時人によって、カールは旧約聖書の賢王ソロモンの再来、あるいはそのソロモンさえも凌ぐと讃えられた<sup>1)</sup>。武より文を好んだカールは、学問の研鑽に励んでしばしば学僧顔負けの聖書釈義を行ない、5カ国語を自在に操り、カール自身の言葉によれば、「チェコ語のみならず、フランス語、ロンバルディーア語、ドイツ語、そしてラテン語を、話し、書き、読むことができた」<sup>2)</sup>。君主はむしろ無文であることが多かった中世ヨーロッパの政治風土にあって、「知恵を得てこそ、支配はいや増す」<sup>3)</sup>と説くこの学識豊かな文人皇帝は時代に異彩を放ち、その特異な個性はとりわけ自叙伝の中に凝縮されている。

君主自身が自叙伝に手を染めるという現象がヨーロッパ世界に見られるようになるのは、中世後期になってからである。カールに

\* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

先駆けてアラゴン王ジャウメ1世(1208～76年)がすでにカタルーニャ語で自叙伝<sup>4)</sup>を手掛け、カールとほぼ同じ時代に生きたビザンツ皇帝ヨアンネス6世(1296～1383年)もギリシア語で同時代史<sup>5)</sup>を綴っている。また、神聖ローマ皇帝としては、ハプスブルク家のマクシミリアン1世(1459～1519年)とカール5世(1500～58年)がカールに続いて自叙伝的作品を遺した<sup>6)</sup>。

こうした自叙伝が君主たちの生きた時代、すなわち中世後期から近世初頭にかけての時代を知る上で、第一級の史料的价值をもつことは言うまでもない。その時代の歴史的事件の考証に役立つばかりではなく、それらの記録は当時の時代と社会の諸相をそのまま忠実に描き出している。たとえ歴史的事件の記述に誤りや偽りがあっても、それらの記録は、そうした誤りや偽りを生み出す精神のありかを含め、当時の世界観・人生観・政治観などの表象世界、あるいは実生活のさまざまな側面や自叙伝の根底を貫く自我そのもののあり方などを鏡のように映し出し、文学や芸術や思想、あるいは法制度や経済システムなどの他の表出形態と並び、歴史の中でヨーロッパ精神が辿った軌跡の貴重な表現形態の一つなのである。カール4世の自叙伝も例外ではない。ヨーロッパ的自意識の、あるいはヨーロッパ的精神の、さらにはヨーロッパ的生そのものの証言として、カールの自叙伝は今日なお研究に値すると言えるだろう。

こうした価値をもつカールの自叙伝を、今回、中世ラテン語の原文から訳出した。もちろん、わが国においては、初めての試みである。ただし、本稿で訳出したのは、全20章のうち冒頭の2章であり、残りは別の機会に改めて紹介したい。初めての訳出なので、最初に自叙伝の基本的性格と構成を解説し、さらに自叙伝の成立時期と作品の根底にあるカールの自意識の所在について検討を加える。なお、当初は訳出した部分から読み取ることの

できるカールの観念的世界の全体像を浮き彫りにする予定であったが、与えられた紙幅を大幅に超えてしまうため、これも機会を改めて論じることにする。

## 2. 自叙伝の性格と構成

中世ヨーロッパにおいて、自叙伝という文学形式が独自に存在したわけではなかった。過去における自分の体験を振り返りそれを表白するという行為は、中世キリスト教世界では多くの場合、神への告白という形をとった。神への告白は言うまでもなくローマ・カトリック教会における重要な秘蹟の一つで、聖職者の前で懺悔し自分が犯した過去の罪を贖うというこの儀式はキリスト教徒が救いを得るために不可欠な行為であり、広く民衆の日常生活に根づいた宗教的慣行であった。こうした宗教的行為を文字の上で表現しそれを思想表現の手段にまで高めたのが、古代ローマ帝国末期の教父アウグスティヌスである。アウグスティヌスの『告白』はキリスト教世界に特有な文学形式の一つを創出し、中世以降多くの文学作品の手本となりながら、やがて近代ヨーロッパに自叙伝という新しい文学形式を生み出す源流の一つとなる。自叙伝を著わすにあたってカールも、このアウグスティヌスの『告白』の存在を意識していた可能性がある。自叙伝の中で聖書釈義を行なう際に、カールは自分の主張を裏付けるためにアウグスティヌスの言葉を引き合いに出しているからである。ただし、その引用は『告白』からのものではなく、カールの自叙伝がアウグスティヌスの『告白』に直接触発されたという確実な証拠はない。

アウグスティヌスの影響をまったく否定するわけにはいかないが、カールが自叙伝を構想する際に意図して選んだ表現形式は、中世ヨーロッパの伝統となっていたもう一つ別の形式、すなわち君主鑑(Fürstenspiegel)

という表現形式であった。君主鑑の系譜は遠く古代ギリシアにまで遡るが<sup>7)</sup>、ヨーロッパ世界にキリスト教が浸透するにつれ、それはキリスト教徒として君主の果たすべき義務や身に具えるべき徳目を並べ挙げる文書、つまり、キリスト教徒たる君主とは本来いかにあるべきかを説く訓戒書として著述されるようになる。中世初期からこうした訓戒書が数多く著わされ、中世ヨーロッパの政治思想は、多くの場合、この君主鑑という文書形式の中で展開された。ルネサンス時代に、この君主鑑から、キリスト教により権力に被せられたヴェール、つまり神により聖別され委託されたという形而上的なヴェールが剥ぎ取られ、むき出しの暴力としての現実の権力が直視されるようになる時、マキャベッリの『君主論』が登場する。

しかし、マキャベッリより150年あまり前に自叙伝を著わしたカールは未だなお中世キリスト教世界の伝統の中に生き、キリスト教徒としての君主の理想像を説く伝来の君主鑑の形態をかりて自分の生涯を綴ったのである。その自叙伝を自らの王位を継ぐ嗣子たちに捧げ、「できうればお前たちへの鑑戒(exemplum) になってくれるように、空しくして愚にもつかぬわが生涯を、余が現世にさすらうことになったそもそもの初めからしたためることにしよう」<sup>8)</sup> と語り、カールはこれから綴られる自分の人生を自らの思い描く君主のあり方の実例であることを明らかにしている。自分の人生を語ることで自叙伝本来の目的ではなく、君主鑑という伝統的な枠組みの中で君主の生き方の見本を提示することがカールの意図するところだったのである。

君主鑑を著わすのに、なぜカールは自分の生涯を語るという特殊な形を採ったのであろうか。自叙伝の中で聖書釈義を行なう際に、カールは真の智者について、「知恵ある学者(scriba doctus)とは、言説の言葉によっ

て(verbo doctrine)のみならず、善き生きざまの手本によって(exemplo bene vite) 教え導き教化する者のことである。なぜなら、理屈を並べても実践しない者は、なるほど学者(scriba)とは呼ばれても、智者(doctus)とは呼ばれないからである」<sup>9)</sup> と説明する。自叙伝は、カールのこうした信条の実践だったのである。学識豊かな文人皇帝と謳われる一方、カールは実際の見聞や体験を重視するきわめて現実的な実践人でもあった。なおも中世的な信仰や観念に縛られながらも、できるかぎり予断を排しあるがままの事実を見きわめようとするカールの行動は、自叙伝の記述の随所に窺うことができる。実践を重んじるカールだからこそ、君主鑑も単なる言説(doctrina)に終わることなく、その鑑戒(exemplum)として自分の人生を語るという形で構想されたのである。

カールの自叙伝はこのように本来は君主鑑として構想され、だから、キリスト教徒として君主のあるべき姿を説く言説と、その鑑戒としての自分の生涯の記述で構成されている。以下にその構成を示す。

## 第1部

- 第1章 生に関する考察
- 第2章 君主のあるべき姿に関する考察
- 第3章 チェコ王国の嫡子としてプラハで誕生  
ルクセンブルク家の家系  
フランス宮廷におけるカールの教育(1316-30年)

## 第4章

帝国内の情勢  
チェコ王である父王ヨーハンによるロンバルディーア諸都市の支配  
カールによるロンバルディーア諸都市の代理支配(1330-

	33年)
第7章	
第8章	カールのモラヴィア辺境伯襲位 カールによるチェコ王国経綸 (1333-35年) 父王ヨーハンの家門勢力拡大政策 ルクセンブルク家と皇帝ルートヴィヒ4世との抗争開始
第9章	ティロール伯の後見 ティロールを拠点とするカールの遠征活動 (1336-37年)
第10章	
第11章	「マタイによる福音書」 13. 44-52の釈義
第13章	
第14章	ティロール領有問題をめぐる皇帝ルートヴィヒ4世との抗争 ヨーロッパ各地への転戦 (1338-40年)
第2部	
第15章	カールによるチェコ王国の代理統治 (1341-43)
第16章	東ヨーロッパ地域での諸事件 (1345年)
第18章	
第19章	皇帝ルートヴィヒ4世との和平交渉とその決裂 (1345年)
第20章	帝国の対立国王としてカールの国王選出 (1346年)

カールの自叙伝は上記のように大きく分けて二つの部分からなり、そのうちカール自身の手になるのは第1部のみで、第2部はおそらくカールに近侍する祐筆の手になるものと

推測される。なぜなら、第1部ではカールは一人称で表記され、語られる主体と語り手が同一人物であることを示すが、第2部ではカールは三人称で描かれ、しかも第1部と第2部とでは用いられる語彙と文体に大きな違いが見られるからである。カール自身の綴る第1部では、第1章と第2章、第11章から第13章までの5章分が言説 (*doctrina*) に当たり、第3章から第10章までと、第14章の9章分がその言説に対する鑑戒 (*exemplum*) ということになる。

ところで、第2部を含む自叙伝全体で描かれるのは、カールが1316年にチェコ王国の嫡子としてプラハに誕生してから、1346年にヴィッテルバッハ家の神聖ローマ皇帝ルートヴィヒ4世 (在位1314~47年) に対抗して帝国の国王に擁立されるまでの30年間である。それは62年に及ぶカールの人生の実は半分にすぎず、しかも王位に坐してからの後半生ではなく、王位に坐すまでの前半生なのである。その前半生はチェコ王である父王ヨーハン (在位1310~46年) によるルクセンブルク家の家門勢力拡大政策 (*Hausmachtspolitik*) に振り回されながら、チェコ王国の王太子としてカールがヨーロッパ全土を東奔西走した日々であり、したがって自叙伝は若かりし日々の体験を綴ったカールのいわば青春譜となっている。君主鑑として構想されたにもかかわらず、カールがいかに君主として振る舞ったかではなく、むしろ、カールがいかにして君主となるに至ったかを描いているのが、自叙伝の主たる内容なのである。

### 3. 自叙伝の成立時期と自意識の所在

自叙伝が執筆された時期に関しては、その年代を確定するに足る明確な記述が、自叙伝の中にも、その他の史料の中にも、どこにも存在しない。しかし、帝国の対立国王にカー

ルが選出された1346年からさほど間もない時期に執筆されたという推測は成り立つ。かりに国王選出からかなりの歳月を経て著わされたと想定するなら、君主鑑として構想されながら国王選出以後のカールの治績に関する記述が自叙伝にまったくないのはあまりにも不自然だからである。ここで考慮すべきは、自叙伝があえてカールの国王選出で終わっているのはなぜかという問題である。実は、この国王選出とほぼ同じ時期に起きたある重要な事件の記述が自叙伝には欠けている。国王に擁立されておおよそ半月後、カールは父王ヨーハンとともに、いわゆる英仏百年戦争における初期の激戦クレシーの戦いに、フランス陣営の友軍として参戦した（皇帝ルートヴィヒ4世はイングランドと同盟関係にあり、従来あまり指摘されることはないが、英仏百年戦争はヨーロッパ全土を巻き込んだ国際戦争でもあった）。その際に父王ヨーハンは戦場で壮絶な討死を遂げ、その結果として、カールがチェコ王国の王位を継ぐことになる。運命の転機をもたらしたカールにとってはきわめて重要であったはずのこの出来事について、自叙伝には一切記述がない。対立国王への擁立からクレシーの戦いまでのひと半月あまりの短期間に自叙伝が成立したとは考えにくいので、クレシーの戦いとチェコ王位の継承に関する記述の欠如は、むしろ帝国の国王選出をもって自叙伝を締めくくることこそが、自叙伝執筆に際してカールの本来意図したところであったことを物語っている。つまり、構想の最終段階で、カールの国王選出が叙述の最終目標に設定され、自叙伝の細部はその最終目標に至る過程として方向づけられ編集されたと考えられるのである。

それではなぜ、カールは自叙伝を自分の国王選出で締めくくる必要があったのか。これを考える際に、カールが対立国王に選出された直後における帝国内の政治情勢に目を向ける必要がある。カールの国王選出は、ヴィッ

テルスバッハ家とその皇帝ルートヴィヒ4世に敵対していたルクセンブルク家を中心とする諸勢力がカールを担ぎ出して行なった分裂選挙の結果であり、いわば一種のクーデタであった。だから、国王に選出されても、皇帝ルートヴィヒ4世はなおも健在であり、カールの国王としての地位はきわめて不安定で、敵陣営からすれば、カールの国王選挙はまったく正統性を欠く違法行為であった。カールとルートヴィヒが並び立つ帝国内の混乱そのものは、1347年にルートヴィヒが狩猟の最中に不慮の死を遂げたことによって突然幕を下ろされる。しかし、カールが帝国全土で広く正統な国王として認知されるには、なおもかなりの歳月を要したに違いない。こうした政治的背景を踏まえて自叙伝をあらためて検討すると、それは君主鑑としての表向きの形態の背後にまったくそれとは異なる相貌、すなわち、自分の国王としての正統性を帝国の内外に主張する政治的プロパガンダという別の相貌を秘めていることに気づかされるのである<sup>10)</sup>。

自叙伝のこうした政治的プロパガンダとしての性格は、当然のことながら、皇帝ルートヴィヒ4世に関する記述の中にもっとも典型的に表われる。そもそもルートヴィヒ自身もハプスブルク家のオーストリア大公フリードリヒと争い、当初は対立国王として擁立され、カールの記すところによれば、分裂選挙の結果、国内不一致のまま国王に選出されたのである<sup>11)</sup>。しかも、ルートヴィヒはその後イタリアに遠征し、当時アヴィニオンにいたローマ教皇の意向に反して一介のヴェネツィア司教によりローマ皇帝に戴冠され、さらにローマで自分の意のままになる修道士を傀儡として対立教皇に据えた<sup>12)</sup>。だから、ルートヴィヒは正統な皇帝たりえず、むしろ皇帝位の横奪者であり、「皇帝を僭称していた」(se gerebat pro imperatore)<sup>13)</sup>に過ぎないとカールは断じる。このようにルートヴィヒが皇帝

であることの非正統性を明らかにしてゆき、そして最終章で、アヴィニヨンの教皇庁によりルートヴィヒの皇帝戴冠の無効が宣告され、新たにカールが正統な国王に選出されたことを記すことで自叙伝は締めくくられる。その際に、「数々の瑞兆を伴って」(*felicibus auspiciis*)<sup>14)</sup> という句が添えられ、カールの国王選出は、神の意志にかない、まさしくその成就であったことが暗示される。

自叙伝の根底を貫くのは、帝国において王位と皇帝位の正統性をめぐって展開されたこうした政治闘争である。その闘争がカールの国王選出をもって決着したことを証し示すことが自叙伝を著わしたカールの主たる関心事であったと考えるなら、自叙伝がカールの国王選出で締めくくられていることへの説明がつく。そして、カールによる正統性への主張がもっとも必要とされていたのはその正統性が疑問視されていた対立国王への選出直後の時期であり、だからこそ、この時期に自叙伝が成立したという推測が成り立つのである。ところで、国王選出という最終目標に向けて綴られていく自叙伝の行間に充ちているのは、長らくヨーロッパのキリスト教世界において歴史叙述の伝統を支配し続けた救済史観である。これは旧約聖書の歴史叙述<sup>15)</sup> に起源をもち、人類の歴史の過程に神が介入し、墮落し混乱をきわめる人類を救うべく神がある特定の目標に向けて歴史を導いていくという歴史観である。自叙伝もこの歴史観に彩られ、随所に超自然的な力の介入や人間界への神の関与が語られる。それは、時には苦境に立たされたカールを救うためであり、時には罪に汚れたカールを戒めるためであり、また、時にはルートヴィヒの所業を罰するためでもある。カールの語るところによれば、帝国やチェコ王国やロンバルディーアで目の当たりにするのは、正統な統治者の不在であり、それに起因する無秩序と混乱、そして、その結果としての諸勢力の分立割拠と抗争である。

自叙伝に綴られるのは、こうした世の乱れの中でカールが悪戦苦闘し、神の恩寵に導かれながら、やがて正統な統治者として選出されていく過程である。したがって、自叙伝は、世の中に秩序と安定を取り戻すため、カールの国王選出という最終目標に向けて、神が歴史を導いていく典型的な救済史の構造をしている。こうした自叙伝の構造に垣間見られるのは、自分こそ神によって正統な国王に選出されたという強い意識であり、この神による召命の意識こそが自叙伝の根底に横たわるカールの自意識の正体なのである。

#### 4. 自叙伝の翻訳 (1)

自叙伝の今回の翻訳にあたって底本としたのは、E. Hillenbrand の校訂本<sup>16)</sup> である。これは現在自叙伝のもっとも新しい校訂本で、元来は19世紀に J. Emler の編集したもの<sup>17)</sup> に若干修正を加え、ドイツ語の対訳を付したものである。20世紀になって J. Emler の編集に依拠したものには、ほかに K. Pfisterer と W. Bulst の校訂本<sup>18)</sup> があり、訳出に際しては、E. Hillenbrand の校訂本を底本としながらも、その元になった J. Emler の編集版と、K. Pfisterer と W. Bulst の校訂版を手元に置いて随時ラテン語本文を照らし合わせた。なお、J. Emler 以前には J.F. Böhmer の編集したもの<sup>19)</sup> があり、それには自叙伝本文の一部が欠落しているが、字句の異同を確認するためにこれも参照した。

本章で訳出するのは、自叙伝冒頭の第1章である。自分の王位を継ぐ嗣子たちへの献辞で始まり、二つの生に関するカールの考察が述べられ、すぐれた生を択び採るようという勸告がなされる。

##### 第1章

わが二つの玉座<sup>20)</sup> に坐す嗣子たちに。こ

の世にも二つの生があるのを知り、すぐれた方を択ぶように。

おぼろげな鏡像の中にもう一つの顔を眺めるにつけ、余は一对をなす生のことに思いを致す。というのも、鏡に見られる顔が実体なく無であるように、罪びとたちの生も実は無だからである。それゆえ、ヨハネ<sup>21)</sup>も福音書で、「言葉によらずして成ったものは無である」<sup>22)</sup>と語るのだ。では、罪びとが営みを成したとき、その営みはいかにして無に帰してしまうのであろうか。罪びとの成すのは所詮罪であって、営みではないからである。営み (opus) とは欲求 (optacio) という言葉に由来し、罪びとが欲求するのは常に快樂であって、この快樂ゆえに罪びとは汚されてしまうのだ。つまり、罪びとが渴望するのは朽ちゆくもの、いずれは無に帰するものであるゆえに、自らの渴望そのものにおいて罪びとは欺かれるのである。肉なるものが朽ち果てればその渴望も消滅し、かくして、罪びとの生は自らとともに無へと葬り去られてゆく。

これに対し、ヨハネは、第二の生について語る。「言葉の裡に成されるのが生であった。この生こそ人の光であった」<sup>23)</sup>と。生がわれわれの光となるために、では、どのように、言葉の裡に生を成せばよいのか。救い主自身がわれわれにこう教えておられる。「わが肉を食べ、わが血を飲む者は、われの裡にあり、われもまたその者の裡にある」<sup>24)</sup>と。こうした霊なる糧で生きる者たちこそ、永遠に安らうことになるのだ。

われわれはいかにして霊なる糧で生きるのかを考えてみることにしよう。われわれが肉なるものとしてさまざまな朽ちゆくものを口にする場合、それらが欲しいという食欲を感じ、われわれの内臓はそれらを貪欲に摂取し、身体の諸器官のすみずみに送ることになる。すると、それらは血液に変えられ、血液にはわれらの生として命が宿り、その命が身体に

宿ることができるのではないか。しかし、肉なるものは朽ち果てるものだから、人は死ぬ。それに対し、魂の生きるもととなる霊なる糧を口にする者の場合はどうか。その人は魂の裡でその霊なる糧に焦がれ、それを貪欲に摂り入れ、畏敬の念をもってうまずたゆまず咀嚼しようとするにちがいない。すると、霊なる糧の熱でその人の裡に甘美と愛の火花が生じ、この火花にこそ魂が生きるのに必要な養分があり、魂はその人の裡に宿ることになるのではないか。

その養分には何ひとつ朽ち果てるものがないように、それを養分としつづける者たちは消滅を一切まぬがれ、永遠に生きることになるであろう。救い主自身これを約束し、ヨハネによる福音書第六章で、「それは天より下った生けるパンである。人がもしそれを糧にするなら、永遠に死すことはない」<sup>25)</sup>と語っておられる。この永遠の生こそ人の光であり、それを授けることのできるのは神をおいて他にない。だからこそ、ヨハネはいま一つの生を死と見なして、「この生こそ人の光であった」と語るのである。もう一つの生が死であるとするのは、正しい。これほどに酷いものはないからだ。快樂に酔いしれる者たちがその罰を同時に受けねばならないほど酷いことがあるだろうか。つまり、その人たちは死ぬばかりではなく、あらゆる瞬間に肉の死にさらされているのである。それに対し、永遠の生を生きる者たちこそよき生者とと言われる。肉の快樂に背を向けることで死の力にさからい、その報酬としてとこしえの悦楽を手に入れたことになるからだ。

だが、霊なる糧を口にしても、自ら欲求し切望したわけではなく、心の外へそれを吐き出してしまふ者も多い。こうした者たちに禍あれ。この者たちの罪過はユダを通して、またその一部はダタンとアビラム<sup>26)</sup>を通して描かれ、それゆえ、霊なる糧もこうした者たちの魂には養分として役に立たないである

う。お前たちも知らぬはずはあるまい。動物が食欲なくして食すれば、うまく栄養をつけることにはならず、かえって腹痛に苦しめられることをだ。お前たちの苦痛はそれにもまして大きくなるであろう。霊なる糧が永遠であるように、お前たちへの罰も永遠であるからだ。お前たちに余は切に願う。この者たちの轍を踏んではならない。お前たちの魂の養分として霊なる糧が授かることを乞い求めよ。お前たちも永遠に生きるため、霊なる糧なくして人生を歩んではならない。だがまた、「人はパンのみにて生きるのではなく、神の口から出るすべての言葉にもよる」<sup>27)</sup>。すなわち、天界のパンは単なるパンではなく、肉でもあれば言葉でもある。それがただのパンにすぎないなら、永遠の生の養分を含んでいるはずがないからである。では、天界のパンが肉であるとは、どうしてか。救い主自身が、「われが与えるパンはわが肉でもある」<sup>28)</sup>と語っておられるからだ。また、ヨハネが福音書で「言葉は肉となった」<sup>29)</sup>と語るように、この肉は言葉でもある。そして、同じくヨハネが「言葉は神であった」<sup>30)</sup>と語るように、この言葉は神でもある。このように、このパンは、肉でもあれば言葉でもあり、同時に神でもあるのだ。だから、このパンを授かろうとする者は、天使たちのパンとも呼ばれる天界のこのパンを介し、肉と言葉と神とを受け容れなければならない。このパンを口にすれば、真理の言葉を受け容れることにもなる。真理の言葉というのも、キリストが「われは、真理であり、命である」<sup>31)</sup>と語っておられるからだ。真理の言葉を摂取し受け容れるのでなければ、その人はこのパンを受け容れたことにはならない。それゆえ、パンを口にする者は、肉をも摂取したことになる。主はパンを弟子たちに与えて、「これは汝たちのために与えられるわが肉体である」<sup>32)</sup>と語られたからである。また、主自身の肉の血を弟子たちに与えて、「これは数

多の人のために流されるわが血によって立てる新しい永遠の契約の杯である」<sup>33)</sup>とも語っておられる。

さて、この肉を口にするとき、人は自らの肉体を減らし、キリストのためにそれを捧げ、自らの十字架を担ってキリストに従わなければならない。キリストの死と受難を分かち、いつの日かキリストの御名の栄光にあずかるためである。ところで、キリスト自ら、「われこそ天より下ったまことのパンである」<sup>34)</sup>と語られたように、この肉を口にするとき、人はまことのパンをも口にすることになる。このパンを介し、キリスト自身がわれわれのために新しい永遠の契約をゆるぎなきものにして下された。このようにゆるぎなくすることを、ダビデは詩篇で、「パンは人の心をゆるぎなきものにする」<sup>35)</sup>と詠う。ところで、永遠のパンを比喻でダビデが語るのもいわれがないわけではない。というのも、ダビデの家はベツレヘムと呼ばれるが、ベツレヘムとはパンの家と解されるからである。神がまことのパンであるわが子キリストの降誕を望まれたのは、このパンの家からである。だからこそ、聖書はキリストをパンの家であるダビデの家の出身と語るのだ。さて、このパンが愛と慈しみでお前たちの心と魂をゆるぎなきものにしてくれますように。そうすれば、お前たちは永遠の国を失わずに、時の国を渡って行くことができるであろう。アーメン。

## 5. 自叙伝の翻訳 (2)

本章で訳出される第二章が本来の君主鑑で、カールが思い描く君主のあるべき姿が示される。

### 第2章

さて、余の後に王冠戴き国を治める日が来



たなら想うがよい。お前たちに先立ち余も王であったが、虫けらの蠢めく塵と泥に変わり果てたことをだ。お前たちも、影のように、野の花のように、移ろいて死すことに変わりはない。門地の高さであれ、財貨の豊かさであれ、正しい信仰と聖なる復活への期待に汚れなき良心がなければ、何の価値があるのか。神を蔑する者どものように、お前たちの人生の評価を誤ってはならない。「神によって創られ無から生まれたのだから、わが身の今在るのは東の間の夢。されば、この世にかつて存在すらしなかったように、わが身もやがては無へ葬り去られてしまうだろう」と、お前たちが考えるとすれば間違いだ。お前たちには、永遠不滅の父とその御子にしてわれらの主イエス・キリストがおられることを忘れてはならない。イエス・キリストは数多の兄弟たちの嫡子で<sup>36)</sup>、その命令を守り、心と良心を汚すことなく、お前たちの血と肉から欲して神の子となるなら、お前たちをもその御国に加えたいと望んでおられるのだ。ヨハネが福音書で、「主はその名を信じた者たちには、神の子となる資格を与えた」<sup>37)</sup>と語っているようにである。だから、神の子とされたいなら、お前たちの父がその御子にしてわれらの主イエス・キリストを介して告げられた命令を守るがよい。イエス・キリストは天界の王であり、地上において、お前たちは、その似姿として、その職務を代行するのだ。わけても大切なのは、心を尽くし、精神を尽くし、主なる神を愛しなさい、また自分のように隣人を愛しなさい<sup>38)</sup>、という命令である。そのような熱情で神を愛するなら、お前たちの魂を神の前に置いて懼れることも、肉体を殺めても魂を害することのできない者どもに怯えることもあるまい。だが、お前たちの父をこそ恐れるがよい。父は、お前たちを救うことも、無限の地獄に突き落とすことも、意のままなのだから<sup>39)</sup>。

まことに主を畏れて歩んだなら、お前たち

に知恵が芽生え<sup>40)</sup>、兄弟たちを正しく公平に裁くことができるようになるだろう。主の正しい裁きをお前たち自身が望むようにだ。かくして、お前たちは邪な道にそれることもあるまい。主の道はまっすぐだからだ。そして、お前たちの憐れみは、欠乏と貧窮に苦しむ者たちに注がれるであろう。欠乏と無力ゆえに、お前たち自身が主から憐れみを得たいと望むようにだ。お前たちの知恵は主の力によってゆるぎなきものとされ、主はお前たちの腕を青銅の弓のように仕立て<sup>41)</sup>、お前たちは激しい戦いを打ち砕き、神を蔑する者どもはお前たちの前に滅び去って、義しい者たちは歓びの声をあげるであろう。神はまたお前たちに仇なす者どもの企みを粉碎し、正義と裁きをなす術をお前たちに教えて下さる。神がお前たちのために隠された企みを露わにし、正しい糾明の仕方を示して、奸智にたけた者もお前たちの面前でその悪事を隠し通すことはできないであろう。知恵の霊、主の叡智がお前たちに宿るからだ。邪なる者どもの眼はお前たちの前で覆われ、神がその者どもの心から言葉を奪えば、その企ては支離滅裂になるだろう。義しい者は生命の安らぎを得、かくて誉れは王のものとなるであろう。「王の誉れは裁きを愛すること」<sup>42)</sup>だからである。

お前たちの王笏もまた主の前で映え耀くであろう。お前たちが王笏を躪いた者に差し出し、狩人のわなから無力なよるべなき者を救い出したからである。お前たちの王冠もまた燦然ときらめき、かんばせも光り輝くであろう。賢者たちの目差しがそれらに注がれ、彼らが主を讃えて、「主よ王の日々になお日々を加え給え」<sup>43)</sup>と言うからである。かくて、お前たちの子孫は義しい者たちの種族において祝福を受けることになるだろう。

貪欲を憎んだなら、富はお前たちの許に溢れ来たるであろう。だからといって、富に心を奪われてはならない。むしろ、知恵こそをお前たちの裡に蓄えよ。知恵を得てこそ、支

配はいや増すからである。貪欲なる者は支配者たりえず、かえって、金銭の奴隷になるだけだ。

邪なる交わりと助言は斥けよ。高潔な者たちと交われればお前たちも高潔になるが、邪悪な者どもと交われればお前たちも邪悪になるからである。つまり、罪は人から人へうつる病気なのだ。それゆえ、主の戒めをしかと守るがよい。主が怒りを放ち、お前たちが正しい道を踏み外して滅び去ることがないようにである。主の怒りは瞬時に燃え上がるからだ<sup>44)</sup>。

もしお前たちが罪に染まる羽目に陥ったなら、敬神と慈悲の泉に再び戻るまで、魂でお前たちの生を厭うがよい<sup>45)</sup>。罪を犯すのは人の習いであるが、罪に執着するのは悪魔の仕業である。神の信頼を害うことで、聖霊に対してまで罪を犯してはならない。さもないと、神の聖霊がお前たちから遠ざかってしまうからだ。聖霊は罪を目の敵にすることを銘記しておかなければならない。

憤怒に我を忘れてはならない。柔和であるがよい。柔和は憤怒に、忍耐は悪意に打ち克つからである。

互いに妬みあってはならない。むしろ、慈しみを分かちあうがよい。嫉妬は憎悪を生むからだ。憎悪する者は愛されず、激怒に駆られて身の破滅を招くだけであろう。だが、慈しみを抱く者は愛し、神からも、人々からも、愛される。

心が高められたいと望むなら、己れを低くし、「高慢の足に踏みつけられないよう」<sup>46)</sup>に気をつけるがよい。高慢は造物主をも善意あふれる人たちをも不快にし、それゆえ、高ぶる者は、神の前でも、人間たちの前でも、好意を得ることがない。しかも、主は終末の日に高慢の鼻をへし折り、権勢ある者たちをその座から引きずり落とし、へりくだる者たちを塵芥から引き上げ、かくて、その者たちも王侯たちと席をともして栄光の座を占め

るであろう<sup>47)</sup>。

飲み食いにつつつを抜かしてはならない。「腹を神とする」<sup>48)</sup>者どもがなすようにである。こうした者どもの栄光と目あては糞尿をうずたかく積み上げることなのだ。

腰を汚してはならない。腰に帯し、意志の強さで身を持するがよい。聖霊は邪淫に溺れる者どもを避け、罪にまみれた身体には宿ることがないからである。

怠惰の過ちから遠ざかるがよい。怠惰の重々しさによってお前たち自身も地獄の底に引きずり込まれるようなことがあってはならないからである。

要するに、若年の頃からどんな罪に対しても警戒を怠ってはならないということだ。初めはささいな過ちといえども、しまいには由々しきものになってしまうからである。むしろ、汚れなくして主の律法を歩み、主から祝福を受けるがよい。主も、「道にあって汚れなく、わが律法を歩む者は幸いである」<sup>49)</sup>と語っておられる。かくして、お前たちは、水の流れのほとりに植えられた樹の、時が来て実を結んでも葉のしおれることのない<sup>50)</sup>ようになるであろう。それどころか、義人たちの名が録された「生命の書」に名を列ねることになるのだ。その書と封印を開くのに相応しいお方<sup>51)</sup>が、そのことをお前たちに約束してもよいとお考えになるにちがいない。

#### 註

- 1) F. Rädle, *Karl IV. als lateinischer Autor*. In: Kaiser Karl IV. Staatmann und Mäzen, hrsg. von F. Seibt, München, 1978, S.253.
- 2) Karl IV., *Vita Caroli quarti*, cap.8.
- 3) *ibid.*, cap.2.
- 4) 尾崎明夫、ビセント・バイダル訳『征服王ジャウメ1世勲功録』(原題は *Llibre dels fets del rei En Jaume*)。京都大学出版会 2010年
- 5) 『歴史4書』(Ιστοριων Βιβλια Δ)。

- 6) マクシミリアン1世は『トイアーダルク』(Theuerdank)と『白衣の王』(Weißkunig)を、カール5世は『備忘録』(Commentaires)を著わした。
- 7) クセノポンの『キュロスの教育』がよく知られている。
- 8) Karl IV., op.cit.,cap.3.
- 9) ibid.,cap.13.
- 10) E. Hillenbrand, *Herrscherliche Selbstdarstellung und politische Kampfschrift*. In: Vita Caroli quarti — Die Autobiographie Karls IV., Stuttgart, 1979.
- 11) Karl IV., op.cit.,cap.4.
- 12) ibid.
- 13) Karl IV., op.cit.,cap.8.
- 14) ibid., op.cit.,cap.20.
- 15) モーセ五書と申命記派の歴史書。モーセ五書は「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」の5書を指し、長らくモーセによって編集されたと考えられたところからこの名がある。ユダヤ教では「トーラー」と呼ばれる。申命記派の歴史書は「ヨシュア記」「士師記」「サムエル記」「列王記」の4書を指す。前7世紀末のユダ王国でエルサレムを中心に大規模な宗教改革運動が起こり、それは「申命記」の思想に触発されて発生したと推測されるところから申命記改革と呼ばれる。この改革運動に直接携わったか強くその影響を受けたグループが申命記派で、このグループが編集したと想定されるのが申命記派の歴史書である。
- 16) E. Hillenbrand, Vita Caroli quarti — Die Autobiographie Karls IV., Stuttgart, 1979.
- 17) J. Emler, *Život Císare Karla IV.*, In: Fontes Rerum Bohemicarum III, Hildesheim,1882, S.323-417.
- 18) K. Pfisterer und W. Bulst, *Karoli IV imp. rom. Vita ab eo ipso conscripta*, Heidelberg, 1950.
- 19) J.F. Böhmer, *Vita Karoli quarti imperatoris ab eo ipso conscripta*, In: Fontes Rerum Germanicarum I, Stuttgart, 1843, S.228-270.
- 20) 神聖ローマ帝国とチェコ王国の玉座。
- 21) 原文は Aquilaris (鷲のようなもの)。中世において、鷲は福音記者ヨハネを象徴する。
- 22) 「ヨハネによる福音書」1.3。聖書からの引用箇所は『自叙伝』の文脈に即して訳出したため、邦訳聖書のとおりにはなっていない。
- 23) 「ヨハネによる福音書」1.4。
- 24) 「ヨハネによる福音書」6.57。
- 25) 「ヨハネによる福音書」6.50。
- 26) 「民数記」16を参照。イスラエルの民がモーセに率いられてエジプトを脱出し荒野を放浪したとき、ダタンとアビラムはモーセの権威に不満を抱き反逆した。しかし神はこの反逆に裁きを下し、大地を裂いてダタンとアビラムとその仲間たちをその中に呑み込ませた。
- 27) 「マタイによる福音書」4.4。
- 28) 「ヨハネによる福音書」6.51。
- 29) 「ヨハネによる福音書」1.14。
- 30) 「ヨハネによる福音書」1.1。
- 31) 「ヨハネによる福音書」14.6。
- 32) 「ルカによる福音書」22.19。
- 33) 「ルカによる福音書」22.20。
- 34) 「ヨハネによる福音書」6.41。
- 35) 「詩編」104.15。
- 36) 「ローマの信徒への手紙」8.29。
- 37) 「ヨハネによる福音書」1.12。
- 38) 「ルカによる福音書」10.27。
- 39) 「ルカによる福音書」12.4-5。
- 40) 「詩篇」111.10。
- 41) 「サムエル記下」22.35、「詩篇」18.35。
- 42) 「詩篇」99.4。
- 43) 「詩篇」61.7。
- 44) 「詩篇」2.2。
- 45) 「ヨブ記」10.1。
- 46) 「詩篇」36.12。
- 47) 「ルカによる福音書」1.52、「サムエル記上」2.8。
- 48) 「フィリピの信徒への手紙」3.19。
- 49) 「詩篇」11.1。
- 50) 「詩篇」1.3。
- 51) 「ヨハネの黙示録」5.9。